

研修会記録

弘前大学21世紀教育センター FDシンポジウム 『教養教育と高等教育との接点』

『教養教育と高校教育との接点』をテーマにした弘前大学21世紀教育センターFDシンポジウムが、8月10日(水曜日)13時から15時までの約2時間、弘前大学総合教育棟2階大会議室で行われました。これは、高等学校と大学の教員が教育内容や教育方法についての問題点を話し合い、相互に連携をはかる目的で開催されたものです。今回のシンポジウムでは「地学」に焦点を絞り、パネルディスカッション形式で話題提供と意見交換が行われました。「地学」を取りあげた理由は、高校では地学を履修する生徒がわずかで教員の確保も困難である一方、大学では専門教育や研究に占める地学分野のウェイトが高く、教養教育での地学教育の充実がのぞまれていることと、地学は環境科学や地理学などと同様に、学際的、統合的な側面を持つことから、理系だけでなく文系科目のモデルケースにもなり得ると考えたためです。当日は会場をほぼ埋める約30名の参加がありました。

まず、高校教育の立場から田中克人氏と境博明氏に話題提供をいただきました。

田中克人氏は青森県立青森高等学校教諭。「地学教育の現状 - 全国的な傾向と本校の現状 - 」という題目で、様々な問題を抱えている地学教育の現状についての報告がありました。地学教育に対する現場教師からの問題提起から始まり、センター試験地学受験者数の推移、減少している地学教員の採用状況といった現状を紹介されました。また、高校地学教科書採択数、地学開講高校数、地学教員数の推移予測とともに、地学を絶滅危惧種に例えたユニークな分析を聞くことが出来ました。

境博明氏は青森県立弘前中央高等学校教諭。多くの具体的なデータを用いた「青森県の地学教育の現状」のお話がありました。まず、県内における地学教育の実施状況の発表があり、地学を設置している高校、実際に開講している高校について説明されました。そして、県内地学教師の年齢構成や、過去10年間の青森県地学教員採用状況をグラフで表し、地学教師が増えない理由を様々な角度から指摘されました。さらに、過去7年間のセンター試験地学受験者数や県内と県外の平均点の比較を提示し、受験科目としての地学を細かく分析されました。また、お話の最後には、地学という教科の魅力を生徒や教員にアピールすることの必要性を強調されました。

つづいて、21世紀教育の立場として弘前大学理工学部の根本直樹氏から話題提供をいただきました。テーマは「地学の基礎」の現状。弘前大学の21世紀教育についての紹介とその中で展開される授業「地学の基礎」の説明がありました。履修者数の推移、授業への学生の評価等を作成したグラフによってお話されました。

話題提供の最後は、専門教育の立場で弘前大学理工学部の佐藤魂夫氏から、教養教育としての重要性をテーマとした話題が出されました。地震等の自然災害関連の報道を正しく理解できることを授業のねらいとして挙げ、解答を記述式とした試験の実施結果を発表されました。また、文部科学省が作成したCD-ROM教材「地底三千マイルの旅」を用いた授業の報告もありました。実際にパソコンを操作して、液化現象、P波速度とS波速度の比較についての説明もありました。

以上の4氏からの話題提供の後、会場参加者との質疑応答や意見交換がおこなわれました。会場からは文系を志望する生徒へのセンター試験受験科目となっている地学の現状や、理系を志望する生徒に対する高校側の対応策、学校教育での実験の重要性の指摘等が寄せられました。そして、教養教育と高校教育との接点について活発な意見が述べられ、今回のシンポジウムは閉会しました。

(注：『21世紀教育センターニュース』第7号(平成17年9月)より転載したのですが、写真は除いてあります。)